最強オリ主ネギま！の世界へ

toni-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強オリ主ネギま！の世界へ

【Ｎコード】

Ｎ０７３７Ｍ

【作者名】

ｔｏｎｉ－

【あらすじ】

ごく普通の生活を送っていた天野（あまの）　良平（りょうへい）は目が覚めたら真っ白な空間にいた。そこで神から自分が神の候補だと聞かされた。神はそこで神になるためにいろんな世界で修行してこいと半覚醒良平にチートな能力をくれた。そうして良平はネギまの世界に修行に行った。

（この作品はチートでご都合主義なところがあるのでご了承ください）

俺は世界に世界に拒絶された！！

俺は知らない空間で目が覚めた。上下左右どこを見ても白。

「ここは？」

「ここは境界、世界と世界の狭間じゃ」

声がしたので振り向くと。爺さんがいた。

「あんたは？」

「ワシか？ワシはお前たち人間で言う神に当たる存在だ」

「は？」

紙？・・・いや神か？

「それでその神様がなんで俺の前にいる」

「ほぉー。普通そんなことを言われたら（本当に神か！？）とか聞かれるものだが」

「なんとなくだが、そんな気がしただけだ」

ホント、なんでだろう？

「フム、それなら話は早い。おぬしは死んだんじゃ」

え？

「し、死んだ？俺が！！」

なんで？・・・・おれまだ１９年しか生きてないのに！

「正確には世界からはじき出された」

「？？はじきだされるって」

「おぬしは霊各と言えば分るかの？言ってみれば魂の格、
それがワシたち神に匹敵する位高いんじゃよ」

え？・・・・それってどういうこと？

「魂の格が高いと言われても・・・・それは何を意味するんだ」

「簡単に言うとじゃ、おぬしは神候補と言ったところじゃ」

「か、神候補！？俺が！？」

マジで！！

「それもただの神ではなく最高神クラスのじゃ」

「・・・・・・・・・・・・・」←絶句中

「ゆえにもし力が覚醒したら世界の方が危険なんじゃ。
だから世界はおぬしをはじき出した」

「なんとなくだけど状況はわかった。」

俺が神ね。だけど納得もいくかな。

俺は周りと自分が何か違う様な感じはしていた。それのせいか俺は友達が少なかった。

「で、結局俺はどうすればいいんだ？」

「ん？とりあえずおぬしには神になってもらうんじゃが、
そのためにはいろんな世界に修行に行ってもらう」

「いろんな世界？」

「たとえばアニメや漫画などの世界じゃ。そこで色々学んでもらう」

「え？そんなところあるのか？」

「あるんじゃよ。世界はそう言った世界も含め無数に存在する。
行きたい世界の希望はあるかの？」

アニメや漫画か・・・・俺はオタクではなかったが友達が少なかったから
漫画とかも暇つぶしによく読んだな。

「なら、ネギまの世界でおねがいできます？」

「構わないが、なんでじゃ？」

「今まで、読んだ中で現実的なファンタジー要素が強いからかな？」

つまり、現実的な世界で生きてきた俺は非現実的な所に憧れている。
しかし、何もまったくわからない異世界はごめんだ。
そこで魔法世界と旧世界がある　ネギまにした。

「さておぬしは神候補とは言ってもまだ力は完全ではない。
そこでこちらで少し力を与えよう。」

「それって、俗に言うチート？」

「まぁ、そんなものじゃ。世界からはじき出された影響で
おぬしは初期覚醒は済んでおるから魔力は世界から供給されるので無限じゃ
その他に不老長寿じゃな」

そうか、魔力無限の時点であり得ないな。しかし不老長寿って。

「神なら死ぬことは無いんじゃ？なんで不老長寿なんだ？」

「それはな。おぬしがまだ初期覚醒しか済んでおらんからじゃ。
これから何かの拍子で覚醒していくことで神に近付いていくのじゃ
初期では不老長寿が基本なのじゃよ」

へ～、そうんなんだ。

「ん？待てよ？俺がもし死んだらどうなる。」

「その時は死ぬだけじゃ」

そうか、神と言っても候補それもまだ半覚醒の状態。

「後、３つほど何か能力やるから決めてくれ。

もっとも覚醒していくにつれ色々な能力がつくだろうが」

3つか・・・・・・・・・・よし。

「1つめは魔眼がほしい。見たものを解析、理解する物レンタルマギカの妖精眼(グラムサイト)で」

「魔眼か・・・・わかった」

「2つ目はリボーンの憤怒の炎とそれをそれに対応した武器を2つほど」

俺、リボーン結構好きなんだよな。

「わかったが武器はおぬしの想像で作ってくれ。向こうに着いたら送る」

後は。そうだな。

「3つ目は、なにはともあれ強くならないといけないから、そのための教本がほしい」

「それは、どんな物じゃ？」

「おれが知りたいと思う魔法や戦闘技術に関して教えてくれる本」

「わかった、なら神の辞典をやろう。それならば調べたいこともすぐ調べられる」

以外に凄い本じゃないか？

[後、名前じゃ。元の名前は使えないからの]

名前か。・・・・・どうしよう？

「う～ん。・・・・・よし。名前はレオン・マスタングで」

キンハのレオンと鋼錬の大佐をくっつけてみた。

「これで全部じゃな、行く時期はどのあたりにすのじゃ？」

時期か大戦には参加したいし、でも力不足は問題だしな・・・・・

よし！

「大戦が始まる頃より２００年ほど前に、２００年ほど修行とその他に色々したいからな」

「わかった。それじゃ逝ってくるのじゃ」

バタン・・・・・・・床が割れて・・・・。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

落ちていった。

俺は世界に世界に拒絶された！！（後書き）

どうも！

実はもう一つ小説を書いているんでが中々まとまらなくて
気分を変えるために書いていたら結構書けたんで投稿しました。

なので更新は基本的に遅いと思いますが時々早いかもしれません。
なんせノリと勢いで書いてますから。

最後によろしくお願いします。

主人公設定（今現在）

主人公　天野（あまの）　良平（りょうへい）ー＞レオン・マスタング

（名前はキンハのレオンと鋼錬の大佐から）

年齢　１９ーーーーーーーー＞１２

容姿　元々イケメンに分類される黒の髪に黒い瞳だったがネギまに来てからは顔は元の銀の髪に金の瞳（妖精眼（グラムサイト）発動時は深紅）

性格　性格は冷静で落ち着いている。滅多に怒らないがお人よしでも無いく

時には冷酷にもなる。その落ち着いた性格から周りからはバクキャラと

言われつつもナギやラカンほど馬鹿をしない事から理性あるバグキャラ

と言われている。

ステータス（仮）

主人公（現時点）　基準（ナギ＆ラカン）

魔力　ＥＸ　　ナギ　Ｓ

体力　ＳＳ　　ラカン　ＳＳ

耐久　ＡＡ　　ラカン　ＳＳ

反射神経　Ｓ　　ラカン　Ｓ
動体視力　Ｓ　　ラカン　ＡＡＡ
幸運　Ｓ　　基準不明

能力

・妖精眼（グラムサイト）
その眼で見たあらゆる物や事象などを解析、理解する瞳
ただし、もたらされる膨大な量の情報に人間の脳が耐えられない。
主人公は半神にみたいなものだからある程度は耐えられるが
長時間の使用は厳しい。

・憤怒（ふんぬ）の炎
家庭教師リボーンに出てきたザンザスが持っていた炎。
絶大な破壊力を持ったエネルギーで主人公は基本銃を媒介に
使用する。

・魔法
ゼクトに習うことで魔法の使用が可能になった。属性は
雷、火、氷、闇、光である。相反する属性が使えるのは
神候補だからとしといてください。本来神なら全属性使えるから。

・年齢操作
文字どうり年齢を変えることができる。基本は１２歳だったが
（本人が１２歳だと自覚してないのもある）
色々あり１６歳くらいにしている。

・？？？？？？？？（主人公の覚醒と努力次第で増える）

所持アイテム

・神の辞典
神からもらった辞典。自分が調べたい事柄を調べてくれる。
主に戦闘技術や魔法、魔法技術などを調べる。
悪用をさけるため妖精眼（グラムサイト）を使わないと
解読は不可能。

・双銃：ガトラ&ラグナ
神からもらった銃。全長１６？重量８ｋ＊２基本憤怒の炎を使うと
きに使うが
通常の銃としてもしよう可能。銃としてのカテゴリーはなく強いて
言うなら
ヘルシングに出てくるアーカードのジャッカル＊２といったところ
です。
反動がすさまじく重力魔法で反動を消している。

・大型スナイパーライフル：ドラグナフ
大型スナイパーライフル、全長２ｍ３０？重量２０ｋこちらも
普通ではないが実弾もしよう可能（ただし特注品になるが）
普通は反動で扱えないが鍛えた体と重力魔法で反動を消すことで
使用が可能になった。

・？？？？？？？？（こちらも色々追加予

主人公設定（今現在）（後書き）

とりあえず、現在の設定です。

後で色々追加していきます。

ネギまの世界。いきなりの遭遇

気が付いたら見知らぬ森の中にいた。

「ここは？・・・確か俺ネギまの世界に来たんだよな？」

起き上がって周りを見渡すしていると。
ボン！！と音がして眼の前に大小のケースが２つと本があった。

「これは？・・・・・・・・神が送ってきたのか？」

近付いて本をパラパラめくっても何も書いてない。

「何も書いてない？どういうことだ」

疑問に思いつつもケースの方を開ける。
中に入っていたのは小さい方に２丁の銃大きい方にライフルが分解して入っていた。

「あぁ、そういえば落ちているときに想像したな。」

そう、落ちて行く時に時間があったため想像していたのだ。

「しかし、俺は銃についてある程度しかわからないしな。」

そんなことを考えていたら、持っていた本が光り出してページがめくれていって
さっきまで何も書いてなかったとこに銃に関しての情報が書き出されていた。

「これは！・・・・もしかして俺が知りたいと思った情報を書き出すのか？」

なるほど。本の使い方はわかった、さてどうするか？

ガサッ

「誰だ！！」

「フム、驚かせてしまったかの？ありえないほどの強大な魔力を感じたんで来てみたんじゃが」

なんだ、この子供？妙に爺くさいしゃべりだな。

それより、魔力か確かに無限の魔力をそのままはヤバイな。

「それは、すまなかったな。いきなりのことが多くて忘れていた」

「それは構わんが、おぬしは何者じゃ？なんでここにいる？」

なんか・・・こいつと話してると・・・神と話してるみたいだな。

「俺か？俺はレオン・マスタングだ。ここにいるのはどっかの馬鹿に転移させられたから。
あんたは？」

嘘では・・・・・ないな。

「わしの名はゼクトじゃ」

・・・・・なにいいいいいいいい。

ゼクトだと！！いきなり原作キャラか

「ここには旅の途中で近くの村に来ていたんじゃが、さっきも言った通り
強大な魔力を感じてここに来たんじゃ」

そう言えば魔力タラタラだな。
このあふれる様な物を抑えればいいのかな？・・・・・・・・・う
ん。上手く行った。

「お！魔力を抑えたのか？」

「あぁ、いつまでもそのままでは駄目だからな」

さて、これからどうしよう？ここでこのままでいいわけないな。

「ゼクト、その近くの村まで案内してくれないか？」

「構わんが。」

ーーーーーーーーーーーーー移動中ーーーーーーーーーーーーーーーー

「着いたぞ」

ここが村か？イメージどおりって感じだな。

「そう言えば！ゼクトは魔力を感じれるなら魔法使いなのか？」

「そうじゃが」

「なら、魔法を教えてほしい」

「おぬし、それだけの魔力を持っていて魔法が使えないのか？」

それはな・・・・・・・ついさっき（感覚的には）目覚めたばかりの魔力だぜ？
抑えれるだけでも凄いと自分では思える。

「この魔力は最近に覚醒したばかりでまだ抑えると放出することしかできない」

「そうか・・・・・まぁいいじゃろ。最近暇を持て余しておったからの」

そりゃ数百年と生きていれば暇にもなるわな。

「では、よろしくゼクト！」

「修行の間は師匠と呼べ」

「わかったよ、師匠」

こうして俺のゼクトの下での魔法修行が始まった。

――――――――――――――――――修行中――――――――――――――――――

ゼクトの下で修行して早2年俺は完璧に魔法をマスターし

オリジナル魔法にてを出すまでになっていた。

え？時間が飛び過ぎだって？特になにも無かったしな。

強いて言うならお互いに不老長寿だと知ったことくらいか。

あの時はゼクト本気で驚いていたな。

「さて、これからどうすのじゃ？」

「とりあえず各地を回ってみようと思う」

「そうか。ならここで別れるかの」

「別れると言っても生きてさえいればまたどこかで会うだろう」

「そうじゃな。またどこかで会おうぞ」

そう言って俺はゼクトと別れた。多分大戦のときにまた会うことになるだろうな。

ネギまの世界。いきなりの遭遇（後書き）

とりえずゼクトと遭遇した。

テテテッテッテッテー

主人公は魔法をおぼえた。

ドラクエ風に書いてみた。
さて、次はどうなるのか作者の俺でも
測りかねます。ノリと勢いで書いてるもので。

では、また次回

ダイジェスト！！大戦開始までの２００年

「ここが・・・・魔境か・・・」

目の前に広がる光景・・それはまさに魔境と呼ぶにふさわしい場所だった。

うす暗く死臭も漂い何より・・・・・・・

「この魔物の数だな」

今俺は魔物に取り囲まれている１０や２０ではない１００や２００の単位だ。

中にはドラゴンやそれに匹敵する体格の奴もいる。

「これからはサバイバルだな」

俺の長い長い闘いはこうして始まった。

ーーーーーーーーーーー５０年後ーーーーーーーーーーーーーーーーー

サバイバルが始まった時から５０年が経っていた。
最初の方は地獄だった、殺しの経験がない俺は魔物とはいえど
生き物を殺したことで嘔吐し自分の馬鹿さを思い知った。
しかし、昼夜問わずに襲ってくるためにブルーアイズやレッドアイズを
召喚して警護させなければ間違いなくやられてた。
一度始めたら降りることはできなかった。

「しかし、これはな。」

俺の周りではいくらかの魔物達が鎮座している。
俺は魔境に済む魔物達の頂点に立ってしまったのだ、
魔物の世界は強い物が上に立つなり生き残る世界だ。

俺はボスと言えるドラゴンいや古龍に勝った。
まず、『燃える天空』で牽制し二丁拳銃から『炎の鉄槌』を連射しまくった。
憤怒の炎により徐々に皮膚を風化させオリジナル魔法『闇の果て』で勝負を決めた。
聞く限りでは簡単に思えるだろうがこの闘い終わるまで丸3日は掛かかりあたりは焦土になった。

「毎日、戦い、戦いばかりだったな。」

魔境を制覇するまでに１０年は掛かった。
以後４０年は魔境で見つけた遺跡や魔道具などを解析、分析しオリジナルの魔法や魔道具を作ったり武術、剣術の鍛錬しながら過ごしていた。
たまに頂点の座を取ろうと戦いを仕掛けてくる奴もいるが、概ね平和だった。

「原作開始まで後、１５０年ほどか・・・・・長く設定しすぎたかな？」

そして、いまさらながら後悔している自分がいた。

ーーーーーーーーーーーーーーーー更に１００年。ーーーーーーーー
ーーーーーーー

この１００年更に色々な物や術式を開発し正直自分は賢者になってないかと
思うこともあった。
しかし、いまだ神の力の覚醒は無かった。

体も鍛え上げられてはいての人間のそれだし、致命傷を負えば死ぬ。
まぁ、人間のそれとは言ってもおそらくラカン並には鍛え上げられたと思う。

「そろそろ、世界を回るか？」

大戦まで後５０年ほど（正確には４７年）になり俺は魔境を出ることにした。

「えっと、忘れ物はないな」

必要な物を収納空間に入れていく。収納空間とはこの１００年で習得した
空間魔法を応用して作った空間である。
他にも重力魔法に少しだけだが時間の魔法も習得した。

ドドドドドドドドドドドドドドドッ

「なんだ？」

地響きが起き向こうから魔物たちが一斉にこちらに向かってきている。
そして俺の前で止まった。

「なんだお前たち？」

全員、こちらを見て何かを訴えている。

「まさか！一緒に行くと言いたいのか？」

魔物の中で一番でかく知能もある古龍ヴォルケイスは静かに頷いた。

「う～ん。どうしよう？」

さすがに魔物の軍団を従えて旅をするわけにもいかない。
そんなことをすれば討伐対象＆賞金首だ。

「だが、全員あきらめるつもりはないようだしな」

思案すること1時間俺はあることを思いついた。

「別荘を使うか？」

別荘・・・それはダイオラマ魔法球と言う名前の魔法具だ。

中に別の空間を作った物り中は自由に設定できることから
王族や貴族の間で別荘と呼ばれている代物だ。

俺はこの別荘を空間魔法と神の辞典を使い独自に開発した。
２つ作ったので片方にここら一帯を入れて
持ち歩く方がいいだろうと判断した。

「よし、お前たちはこの杭をこれから言う場所に打ってこい」

そう言って知能が高い奴らを集めて別荘に
入れる部分を決めてその外周に杭を打たせた。
そうすること半日ようやく杭も打ち終わり呪文を詠唱すること
更に半日後魔法を発動させた。
『空間転送』そう唱えると瞬く間に目の前の空間が歪みまるで蜃気
楼のように
魔境が消え荒れ地が残った。

「よし！これでいいだろう確認に行くか」

俺は問題が解決したことに安堵し再び荷物をまとめし一度別荘の中
に入ってみた。

「おぉー、これは壮観だな。」

別荘の中に入ってみるとちゃんと転送出来ていた。
中では相変わらずの日常が繰り返されていた。
この中は外と違いここでの一日が外では1時間だ
つまり外での1日はここでは24日になる。

「この設定だと、凄いことになりそうだな」

そう思いながらも俺は別荘から出て旅を始めた。
後にこの魔境の消滅は魔法界の不思議として語り継がれることになるがそれは別の話。

――更に47年――

原作道理に大戦が始まった。記憶としての知識はほとんど忘れたが、記述することで保存していた。
この47年で変わったことと言えば神の力（？）が覚醒して肉体年齢を変えることができるようになった。
これは神の力の一つなのかと疑問に思うため（？）と付けさせてい

ただく。
もう一ある。それは別荘だ、もうカオスとしか言い表せない状態だった。

俺が行く先々で色々な魔物に会い気に入った奴を別荘に入れたりしたおかげで
新種の魔物やら進化したような奴もいた。
後、別荘の許容を超えそうだったので別荘同士を繋げることで増設した。
各エリアごとに特性を持たせ自由に移動できるように
改造したのだが・・・これがまた更なるカオスを招くとは俺もこの時は予想してなかった。

「さて、俺はどう動こうかな？」

赤き翼に合流してもいいし、いっそ完全なる世界に一員になるのもありだな。
さてさて、どうしたものか。

そうか考えていると向こうから軍隊と思わしき連中がぞろぞろとやってきた。

「おい！ガキ何者だ？」

無駄に高圧的にじゃべってくる指揮官らしき奴

「なにって、俺は旅人。旅人が旅をするのはおかしいのか？」

「ガキが～なに偉そうにしているんだ。まさか！旅人を偽った連合のスパイか！？」

「はぁ？なんでそうなる？」

「構わんこいつを始末しろ！！」

ちょ！！なんでいきなりそうなるかな？

だって俺見かけは１２歳だぞ・・あ！１２歳がこんなとこを１人旅してる方がおかしいか！

「かかれー」

「あーもうめんどくさいな！『闇の果て』、『絶対零度』、『獄炎の世界』」

自分が持つ広域殲滅型の魔法を連発した。そうしたら文字通り周りが地獄のようになっていた。

「やって・・・・しまったな」

これからはもう少し疑われないように年齢を変えよう。だいたい１

６歳くらいでいいか？
これで指名手配とかだったら本気で泣きたい。

ダイジェスト！！大戦開始までの２００年（後書き）

登場魔法説明

●『闇の果て』

簡単に説明すると黒い空間が広がって
その中に取り込まれてボコボコにされる。
極端な話、撲殺するということ。

●『絶対零度』

基本は『おわるせかい』と同じだが広域殲滅から対人まで
幅広く範囲の変更が効くのが利点。

●『獄炎の世界』

『燃える天空』などの爆発系ではなく
効果範囲内をドロドロの溶鉱炉状態にしてしまう。
レオンの魔法の中でも凶悪かつ強力な物の１つ。

オリ主と紅き翼の邂逅

ｓｉｄｅナギ

おう！俺はナギ・スプリングフィールド、俺は今、紅き翼を率いて大戦に参加している。
俺の周りには、いつもフードを被ってるぶっちゃけ凄く怪しいアルビレオ・イマことアル、
日本の神鳴流とか言う流派の剣士である近衛詠春に俺の魔法の師匠であるゼクトがいる。

俺たちはかなり活躍していたんだが、それを疎ましく思った
お偉方が俺たちを辺境に飛ばしやがった。辺境に飛ばされて数日、
何事もなく過ごしていると。

「なぁナギ、やっぱり団体を名乗るには人数が少ないと思はないか？」

「あぁ？仕方ないだろ、俺たちの強さについて来れる奴がいないんだから！」

「俺たちとは言いますが、バグキャラはあなただけですよ」

「まったくじゃ」

ヒデェ、師匠まで。

「なら、お前ら心当たりあるのかよ？」

強い奴なら誰でも歓迎するんだがな。

「ないな」

「私もです」

ほらな。

「わしも・・・・・・・・・いや、一つだけ心当たりがあるの」

え！？師匠マジ！

「師匠！！心当たりがあるのか？」

「ウム、奴なら問題ないじゃろう」

「ゼクトそれは誰なんです？」

「レオン・マスタングというやつでな、
２００年ほど前に会ってわしが魔法を教えたんじゃ」

え！？それじゃぁ俺の兄弟子？

「しかし、そんな名前聞いたことが無い」

「そうですよゼクト」

「心配ないわ。奴は当時でさえ今のナギを上回る魔力を持ち
更に何か固有の能力を持っておったからの」

マジかよ。俺より魔力が上って！

「でも師匠、そいつが今どこにいるかが問題だろう。
第一に２００年前って生きてるのか？」

「それは問題ない。奴はわしと同じで不老長寿だからの」

「バグキャラですね」

「あ、頭が」

詠春、お前は気にしすぎだ。

「どこにいるかはさすがにわからんの。
容姿は特徴的じゃから見つけられるとは思うが」

「どんな容姿なのですか？」

「まず、髪が銀髪で目の色が金色だったの、
年齢は１２歳位でかなり落ち着いた性格じゃたの」

１２歳って・・あ、不老長寿なんだっけそいつも

「よし、とりあえずそいつを仲間にしようぜ！」

「待てナギ、居所もわからないのに無暗に探しもみつかるわｋ（
見つかるかも知れません）え！？」

「実は先日立ち寄った町で気になる話を聞いたのです」

面白そうだな。

「なんだよアル、持ったぶらずに教えろよ」

「ゼクトの言ったような容姿の子供がその町の近くで帝国の部隊を
全滅させたという噂です」

・・・・・・それは可能性が高いな。

「とりあえず目的地はそのあたりでいいのではないでしょうか？」

「まぁ、他に手掛かりもないしの」

「よっしゃー、いくぜ！」

「はぁ～」

こうして紅き翼は戦いながらレオン・マスタングを探すことになった。

ｓｉｄｅレオン

どうも、レオンだ。俺は今ある街でお茶をしている。
先日の帝国軍に襲われた時はまいった、詳しく伝わらなかったおかげか
賞金首とにはならなかったが噂は立ってしまったようだ。

「さて、ここは一応連合の領土だが辺境だしな、とりあえず首都のメガロセンブリアでも目指してみるか？いやいっそ帝国に潜入してみるのも
ありだな」

お！そう言えばこの時期って紅き翼が辺境に飛ばされるあたりじゃないか？
以外に歩いてたら・・紅き翼が現れた・・コマンド・・戦うってなるかもな。

「た、大変だ！！帝国軍がすぐそこまで来ている！！」

帝国軍が？こんなところに来るなんて珍しいな。
基本的に帝国は首都メガロセンブリアを陥落させるのにあちらに戦力を割いてるはず。

「行ってみるか」

ーーーーーーーーーーーーー場所は移って戦場ーーーーーーーーーーーーーーーーー

ドガァン、ゴォン、ボォン。
激しい爆音とともに悲鳴も聞こえるな。しかし、４人対１０００人って・・・・・
それでも４人側が押してるのが変な感じだ。

はて？なんか、見たことあるようなあの赤い髪の少年と白い髪の少年。
少し手を出してみるか？

ｓｉｄｅネギ

「おらぁー、『千の雷』」

くっ、キリが無いな。

「ナギ！！あまり前に出るな、孤立するぞ」

「へ！俺なら平気だぜ詠春」

「まぁ、バグキャラのあなたなら平気でしょうね」

アル・・・・いい加減にその呼び方やめろ。

「おぬしら、喋ってないで敵に集中せんか！！」

おっと、いけね。

「『メテオ・ブレイズ！！』」

ドゴォーン。

「な、なんだ！！」

空から何か降って来たと思ったら敵に命中してクレーターが出来たぜ。

「新しい敵でしょうか？」

「しかし、今の攻撃はわしらを狙ったものではない！」

ザッザッザッザッ

フードを被った奴がこっちに向かって歩いてきた。

「お前は誰だ！？」

「・・・・・・・・・・・・」

答えないな、それともなめてるのか？

「おい！！こｔ（久しぶりだなゼクト）へぇ！？」

思わず間抜けな声を出してしまった。

ｓｉｄｅレオン

ゼクトだなってことはこの赤い髪のがナギか。

「おい！！こｔ（久しぶりだなゼクト）へぇ！？」

何間抜けな声を出してるんだか。

「久しぶりと言われてもおぬしが誰かわからんの？」

「あ！フード被ったままだった」

そう言い俺はフードを取った。

「！！、おぬしはレオン！！」

「な！レオンって師匠が言っていた！！」

「確かに容姿は一致しますが、年齢的に」

「それは、肉体年齢変更できるようだから変えている」

受け答えしていると「あ、頭が」と聞こえてきた。

「おぬし、何故ここへ？」

「なに、近くの村でお茶をしてたら帝国軍が来たと聞いてな
このあたりでは少々珍しいから見に来たんだ」

帝国軍の一部隊を全滅させた俺のセリフじゃないいげどな。

「そうか。ちょうどわしらはおぬしを探していたんじゃよ」

「俺を？」

なぜ？

「そ、そうだった！レオン、俺達の仲間になれ！！」

「はぁ？」

仲間になれって、紅き翼ルートかよ。

「力的に問題はないじゃろう」

「ええ、あの攻撃を見れば納得します」

「まぁ・・確かに」

おい、そこの剣士何か問題があるのか！？

「まぁ、やることもないしいな。オーケーだ」

「よし！！これからよろしくな！！」

こうして俺は紅き翼に入った。

オリ主と紅き翼の邂逅（後書き）

『メテオ・ブレイズ』
『燃える天空』１０発分を圧縮し球状にしたもので
限界まで圧縮された球体はぶつかると同時に
爆発して攻撃する。

えー、主人公が赤き翼入りしました。

次回は筋肉達磨あたりでも出そうと思います。

登場！ジャック・ラカン（筋肉達磨）！！

ｓｉｄｅレオン

紅き翼に入って結構たちました。基本ここに敵が来ることはあまりないし
来たとしても大半が悪魔で構成された奴らだから結構楽ではある。

これが旧世界は日本の鍋料理ってやつかぁ。じゃ早速肉を～」

「あっ、ナギおまっ・・何肉を先に入れてるんだよ！」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「トカゲも悪くはないが少し硬いぞ」

「食べたことがあるのですか！？」

そう言ってアルが驚いている。

「バッ、バカ火の通る時間差というものがあってだな」

「うるさいぞえーしゅん」

向こうではナギと詠春が言い争っているし。

「フフ、詠春知ってますよ日本ではあなたのような者を・・・『鍋将軍』
と呼び習わすそうですね」

鍋将軍？・・・あれ鍋奉行じゃあ無かったか？

「ナベショーグン！？」

「つ・・強そうじゃな」

もう、手遅れだな。間違った認識なんだがな。

「わかったよ・・詠春俺の負けだ今日からお前が鍋将軍だ」

「全て任す。好きにするが良い」

「んー・・うれしくないなー」

まぁ間違って覚えられてるからな。

「おぉなんじゃこのソース旨いぞ？」

「ホントだうめえっ！？」

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ」

醤油か・・・久しぶりだなこの味は、俺も元は日本人だからな。

「おいナギ、肉ばっか食べるなよ」

「いいじゃんか、食べたいんだから～」

そんな会話をしながら鍋を食べていると

ヒューーーーンドガァーーーーン

空から剣が降ってきた。飛んだ鍋はと・・・・・え、詠春の頭に！！

「食事中失礼～～～～ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！」

「なんじゃ？あのバカは」

「おい！詠春だい（フッフッフ）・じょう・・・ぶ・・・か？」

鍋を被り、不気味な声で笑い出した詠春。

「食べ物を粗末にするやつは・・・・・斬る！！」

物凄い剣幕を放ちながら乱入してきた奴に向かっていく。
そう言えばあれってラカンなら・・・・あ！詠春やられた。

「おもしれぇ！！おい手出すなよ！！」

ナギの奴がラカンに向かって行った。

「どうします？」

「俺が鍋を作りなおす」

「できるのか？」

腐っても元は日本人だからな。

「まぁ、詠春のを見てたし、ゼクト鍋取ってきてくれ」

「わかった」

こうして俺たちは3人で鍋を再開させた。

ーーーーーーーーーー１０時間後ーーーーーーーーーーーーーー

あいつらいい加減に終われよ！

「まだ続きそうですね」

「バカどもが」

「俺は弱くない、俺は弱くない」

「詠春いい加減に立ち直れ！」

詠春は起きたいいがさっきからブツブツうるさい。

「レオン、どうにか止められませんか？」

「アル、何故俺に？」

「いえ、バクキャラはバクキャラにまかせようかと」

「ちょっと待て！俺がいつバクキャラになった！？」

「ゼクトから話を聞いたときからです」

「ゼ～ク～ト～」

「わしはありのままを間違えずに伝えただけじゃ」

はぁ～、俺もついにあいつら（ナギ&ジャック）の仲間入りか。

「あ～、わかったよ」

さて、どうやって止めよう？・・・・・・・・あれ試してみるか？

「レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ『深き闇』」

『深き闇』その名の通りの深き闇が相手を飲み込みむ。基本は捕えるためのもの。

「うぉ！なんだこれは！？」

「あ、足を取られｔ！？」

二人はズブズブと闇の中に沈んでいった。

二人を止めたはいいがその後ナギとジャックが勝負しろと言ってきた。

結果か？軽くぶっ飛ばしてやった、少なくとも１００年は体術や武術の
修行もして来たからな。

そして、なんだかんだでジャックの奴が仲間になった。ジャック曰く「面白そうだがら」
だそうだ。

登場！ジャック・ラカン（筋肉達磨）！！（後書き）

主人公の始動キー『レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ』
特に意味はない。強いて言うなら各先頭をラ行で統一。

『深き闇』
地面もしくは空間に闇を展開して相手を飲み込む
『闇の果て』を捕獲用に改造した結果できた呪文
ゆえに捕獲に適している。

次回はグレイトな橋での話半分とアリカ姫との邂逅で
行こうかと思っています。

時間はかかりそうですが。

奪還？いや殲滅だ！！

ｓｉｄｅレオン

今、俺たち赤き翼は辺境から呼び戻されグレートブリッジにいる。

「なんでこうなるのか」

目の前には何千という敵、対してこちらは俺一人。

「（聞こえますか？）」

「アルか？」

「ええ、どうやらそちらに援軍は送れそうにありません」

俺1人で何とかするしかないか。・・・・・あれ・・使うか？

「わかった。なら逆に手が空いても誰もこっちによこすな！」

「いくらあなたがバグキャラでもキツイと思いますが？」

「奥の手というやつだ」

「わかりました。では頑張ってください」

そう言ってアルからの念話が切れた。

「転送召喚！」

俺の周りに無数の魔法陣が展開され、そこから魔獣が次々に出てきた。
古龍に王龍、魔狼など伝説級の奴もいる、相手はいきなり現れた魔獣に
動揺して恐怖している。あと、ドラグラフを構えた。

さて、・・・始めますか。

結果から言うと勝ったいや圧勝だった。
混沌の聖域（魔獣がいる別荘）から魔獣を召喚して戦力差を覆し
援軍としてきた戦艦は憤怒の炎とドラグナフのセットで遠距離から
撃ち落とし
魔獣の攻撃から生き残った敵軍を魔法を連発して殲滅した。

この戦いのせいで俺にも二つ名がついてしまった。
『黒銀の殲滅者』『魔王』『炎弾の撃ち手』など。

『黒銀の殲滅者』については俺の格好が黒を強調した服装に銀髪だからだと思われる。
『魔王』は魔獣達を従えて戦ったことから、『炎弾の撃ち手』は憤怒の炎を銃を使って撃っていたことからだ。

その後、仲間からは・・・・・・・。

「「もう一回勝負しろ！！」」（ナギ&ジャック）

ナギとジャックは俺が全力で相手をしてなかったことがバレ勝負を挑まれ返り討ち。

「フム、末恐ろしい奴とは思っていたが、これほどとはの」（ゼクト）

ゼクト、何思い出に浸ってるんだ。

「やはり、バグキャラですね」（アル）

お前はそればかりだな。

「あ、頭が」（詠春）

詠春お前は気にしすぎだ。胃に穴が開くぞ。

後、ガトウとタカミチが仲間になった。

グレートブリッジ奪還戦から少したったある日俺ら赤き翼は首都に呼び出されていた。

「何だよガトウ急に呼び出して」

「すまんな。実はあって欲しい協力者がいるんだ」

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

「ウェスペルタティア王国・・・アリカ王女」

あー、そういえばこんなイベントがあったな。

「お姫様よろしく。俺様はジャック・ラカン！だ」

そうラカンが自己紹介をし握手を求めるが、それに対して

「気安く話しかけるな下衆が」

そう言い、ラカンの顔を叩いた。・・痛そうだな。

その後、ナギも同じように叩かれたが・・なんかジャックの時と微妙に叩き方が違う。

「なぁ、ジャックもしかして」

「あぁ、俺もそう思うぜ！」

やっぱりか・・ナギ祝うべきか同情するべきか・・・まぁ、がんば

れ。

奪還？いや殲滅だ！！（後書き）

『混沌の聖域』
魔物がいる別荘の名前、カオスなことから
安直ですが考えまいした。

次回は少し話をそらしてみようと考えてます。
赤き翼から離れて少し単独行動とか。

では！！

ついに俺もお尋ね者！！

ｓｉｄｅレオン

あれから俺たちはアリカ姫に協力して「完全なる世界」を調査することになった。

「完全なる世界」聞いた話だと各国のかなり深いところまではいっているようだ。
俺たちは肉体班と頭脳班に別れて行動を開始した。俺は基本的に肉体班だった。
理由は強いだけではなくここ最近ナギとジャックのストッパー的な役割させられている
からである。詠春は泣きながら喜んでいた、そんなに辛かったのかストッパーの役割。
アルからは、「あなたはバグキャラですがあの二人のように暴走しませんし、これからは
理性あるバグキャラと言わせていただきます」なんて変なあだ名を付けられた。

「これは！？」

「どうしたガトウ？」

ついでに言うと俺はガトウから咸卦法を教えてもらった。習得するの忘れてたので。
そのわかりにガトウがいないときは俺がタカミチの稽古を付けている。

「あぁレオン・・いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが
・・・これがどうも信じがたい内容でな」
「情報ソースは確かなんだが。信じていいんだか悪いんだか
・・しかしこれが確かなら奴らの行動も」
ガトウは眉間にシワを寄せて唸っている。
「なんだ？はっきりしないな」
「執務官（コンスル）・・・メガロセンブリアの？2までもが奴らの配下に
入っているという情報だ」
「なっ！マジかよ」
驚くラカン。当然だな、自分たちが所属する連合の？2が敵となると。
「この事はもう少し黙っていよう。弾劾裁判をするにも証拠がない」
「そうだな」
ドガァーーーーン
「ん！？なんだ！」
「爆発音？少し遠いな」

気になるので外に出るとアルと詠春がいた。

「アル！何か有ったのか！？」

「レオンですか、何か町の方で爆発が」

町？町っていうと。

「確かナギとアリカ姫が買い物に行ったはずだよな？」

「「まさか！！」」

お！ガトウと詠春がハモッた。

結局予想の通り、ナギとアリカ姫は襲われたのをいいことに相手の拠点まで
乗り込んで壊滅させた、とのことだった。

「ナギ！お前というやつは、アリカ姫に何かあったらどうするつもりだったんだ！」

「うっせーな詠春、いいだろ無事だったんだから」

現在ナギは詠春に説教されている。ナギの奴、反省する気ないだろ。

「それは無事だったから言えるセリフだ！！そもそも」

「あー、わかったから。それよりいいもの見つけきたぜ！」

「「「いいもの？」」」

「これだ！」

それは、さっきガトウと話していた執務官（コンスル）と「完全なる世界」との関係を決定付けるものだった。

「「なっ！」」

詠春、ガトウ、２人は驚きアルは相変わらず笑っている。

それからすぐに、ナギとアリカ姫が見つけた証拠を持って、ガトウ、ナギ、
ラカンと共にマクギル元老院議員に会いにきた。

「ご苦労証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ・・法務官はまだいらっしゃいませか」

ガトウが答える。

「法務官は・・・来られぬこととなった」

ん？・・・この前会った時と何か違う。・・・・気配か！！

「ナギ」

ナギに小声で聞いてみた。

「ああ、わかってる。」

ナギも気づいていたか。

そこから1秒も待たずマクギル元老院議員に向け攻撃を仕掛ける。

ボゥンッ

攻撃が顔に直撃する。

「ちょ！？ナギおまっ・・何やってんだよっ。元老院議員に攻撃っ

て、レオンも！！」

突然のことにガトウが混乱しだす。

「ガトウ、よく見ろ。アレはマクギル元老院議員じゃない」

「何っ！？」

俺の説明でさらにガトウが混乱した。

「よくわかったね「千の呪文の男」「黒銀の殲滅者」、こんな簡単に見破られるとは」

「見た目は良かったさ。だが気配が違った」

変装を解いた白髪の青年の言葉に答える。

「フム、もう少し研究が必要なようだ」

「マクギル元老院議員はどこだ！！」

ナギが怒鳴りながら聞いた。

「・・・本物のマクギル元老院議員は残念ながら既にメガロ湾の底だよ」

「こいつ！！」

「わ、わしだ！マクギル議員だ　スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーク、マスタング。　奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！」

白髪の青年がマクギル議員の声を真似て部下に連絡しだす。

「げ！」

「やられたな」

君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

「逃げるぞ『ダークゲート』」

俺は闇属性の転移系オリジナル魔法を発動して全員を首都郊外まで転移させた。
この魔法、夜しか使えないが転移の範囲は魔力が持つ限りとほぼ距離の制限がない。

このことにより俺たち紅き翼は反逆者として連合を追われることになった。

ついに俺もお尋ね者！！（後書き）

今回は大変だった。

課題とか課題とか課題とか。

もうすぐ夏休みだけどその前だけに大変。

怒りのレオン？

ｓｉｄｅレオン

「じゃ、レオンまかせたぜ！」

ナギ、後で覚えてろよ。

「フフ、あなたも大変ですね」

アル、そう思うなら変われ。

「まぁ、お前なら問題ないな」

詠春、どういう意味だ

「男だろ～、ウジウジするなよ」

ラカン、後で殺す！

え～、状況がわからない人もいるだろうから簡単に説明すると

俺たちが反逆者になった後アリカ姫も捕まり夜の迷宮とか言うとこに幽閉されたらしい。

当然すぐに助けに行くことになったのだが、敵の数が多く誰かが囮をすることになった。

公平にくじ引きで決めようとナギが言いだしたのでくじを引いた結果、俺がすることになった。

それならまだいい！だが、俺は徹夜明けで物凄く眠いのだ。
元々俺はゼクトやガトウと共に拠点で休むはずだった。
なのにこいつらは・・・・・！！！！！。
ちなみに、なんでラカンがやらないのかというと
「あ～、今日俺そんな気分じゃない」と言っていた。

「はぁ～、鬱だ眠い」
目の前には総勢１０００人ほどの軍、倒せないこともないが・・・・
あぁーもういい！！
「覚悟しろよ！今日の俺は機嫌が悪い」
殲滅だ。

ｓｉｄｅアリカ

この場所に幽閉されてからどのくらい経ったの。まだ助けは来ていたない。
「アリカ～我らはいつまでここにいればいいのかの～？」
そう私に声をかけてくるヘラス帝国の第3皇女。

ドカーーーーンッ！！！

「！！」

「な、なんじゃ！？」

凄い振動と同時に爆音が響いた

「の、のう？アリカよ。これは助けが来たと考えるべきなのか？」

「わからない。だがここに何者かが襲撃を仕掛けているのは間違いない」

ドゴンッ！　バァーン！

ドガッ！！

壁の向こうから何やら鈍い音がする。まるで壁自体を壊そうとしているかのような大きな音だ。

ガラガラガラガラッ！！

鈍い音を立てて壁が崩れ去った。

「よぉ来たぜ！姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

ｓｉｄｅナギ

やっと見つけたぜ！それにしてもさっきのは凄い音だったな。レオンの奴か？

「ナギ！ここに長居は無用ですよ」

「ああ、わかってる！」

俺たちは全員外に出た、そこで目にしたものは。

「なんだこれ？」

「たぶん、レオンですね」

「あいつ、キレかかってたからな」

目の前には巨大なクレータが出来ていたそれこそ首都クラスの町が丸ごと入るような一つのクレータが。

「これからは彼を怒らせない方がいいですね」

アルのつぶやきが聞こえた。

ｓｉｄｅレオン

俺は敵を殲滅した後すぐに拠点に戻って寝た。
１時間位して全員が帰ってきた。
俺は『時の庭園（魔物の入ってない方の別荘）』を使って寝たため十分睡眠をとれたのだった。
そして、外に出ると・・・・・・。

「じゃが・・・主と主の赤き翼は無敵なのじゃろ？」

「へっ、そうだな。まぁ、最強は俺だが」

ナギ・・・世界は広いぞ。

「世界全てが敵ーー良いではないか。こちらの兵はたったの８人、だが最強の８人じゃ」

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ」

「やれやれ、相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ」

「いいぜ、俺の杖と翼あんたに預けよう」

ここにアリカ姫との同盟（？）が正式に成立した。

ちなみにラカンは第三皇女と遊んでいる。

最終決戦！！そして

ｓｉｄｅレオン

あれから「完全なる世界」の拠点という拠点を潰して回ること早半年
俺たちは最終決戦を挑むことになった。
そして俺たちは今、王都オスティアの最奥部〈墓守り人の宮殿〉に
来ている。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「それとも隠し玉でもあるのか」

「無いことを祈りましょう」

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成舞台、準備完了しました」

えーっと誰だっけ？最近主要な部分以外は薄れてきてるからな。あ
！セラスだっけ。

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が
本丸に突入できる。

「ハッ、それでナギ殿、レオン殿」

「ん？」

「なんだ？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

えっ！以外に俺も人気だったのか？

「おう！いいぜ」

「まっ、いっか」

そう言ってサインを書いてセラスに渡した。

「そ、尊敬しておりました」

そんな人間じゃないと思うけど俺は。

「さて！久しぶりに派手にやりますか！！」

そう言って俺は呪文を唱え始める。かつて夜の迷宮で囮をしたときに使ったこれやつを。

「神の一撃、『終焉の閃光』！！」

ドゴーーーーーンッ！！！

「お、お前それって！？」

「ああ！前に夜の迷宮で使ったやつさ」

光属性の魔法を一点に収束して放つ、収束した光の光線は着弾と共に破裂して巨大なクレータを作る。

周りの兵士たちは唖然としているがナギ達は持ち直したようだな。

「いくぞ！！」

ナギの掛け声とともにみんなが突入していく。

「あ！そうだ！！「転送召喚」！！」

混沌の聖域から魔物を呼び出して味方の援護をするように言っておいた。

ーーーーーーーーーーーーー墓守り人の宮殿内部ーーーーーーーーーーー

「やあ、「千の呪文の男」、「想像者（クリエイター）」、また会ったね？、
これで何度目だい？　僕達もこの半年で随時と数を減らされてしまったよ」

「ちょっとまて！！　「想像者（クリエイター）」ってなんだ！？」

俺にそんな二名あったか？

「まぁ、一般人にはあまり知られてないけど、僕たちの仲間や両国の兵士の中
では最近有名だよ。　君が次々とオリジナル魔法を使うから」

なるほど、それで「想像者（クリエイター）」か。

「さて、始めようか」

奴がそう言うとナギは、そいつに向かっていた。

俺とアル、ラカンに詠春、ゼクトはその他に向かっていた。

久しぶりに銃を使うか。

「ぐふっ、理不尽なまでの強さだね」

「言え！黄昏の、いやアスナ姫はどこだ！！」

そういばナギはアスナと何気に中がよかったっけ。

「フッ、まさか君たちは僕が黒幕だとでも思ってるのかい？」

「なんだと！？」

ん？・・・・この気配は・・マズイ！！

「ナギ避けろ！！」

俺が言うのと同時に光線がナギを貫いた。

「いかん！合わせろレオン！！」

「ああ！！」

「「最強防御！！」」

俺とゼクトで防御したが一撃でボロボロだ。

「まだまだっ！！属性防御！」

属性防御は俺が使える属性の魔法を相殺しないように重ね合わせた防御壁。

最強防御よりも防御力はあると思っている。

バリィィン

「何！これでも駄目か！こうなったら『マジックストリーム』」

『マジックストリーム』は只魔力を嵐のように流すだけの技だが以

外に強い、
全魔力を使い単純力技で押し込むといったものだ。
なに！押し込まれているだがこれ以上はやらせんぞ！！
ドガァーン！！
すさまじい爆音が響きわたった。
「くっ一体何が！」
「あれは」
「よ、よぉ！無事か？」
「あなたに比べればマシでしょうね」
事実俺はボロボロで誰がみても満身創痍だった。
「アル！ナギを治療しろ。今、奴に勝てるのはナギだけだ」
「しかし！」
「早くしろ！！」
アルは渋々だがナギの治療を始めた
「ナギ」
「なんだ！？」

「勝ってこい」

「はっ、誰に言っている。俺は「千の呪文の男」の男だぜ！！」

ナギらしいな。俺はそこで意識を失った。

ここは？

俺は白い空間の所に立っていた。

「俺は・・・死んだのか？」

「いや、そうではない」

後ろを向くと神の奴が立っていた。

「どういうことだ？」

「なに、お主の覚醒率が一気に上がったので一応連れて来たんじゃよ」

「そうか」

死んだわけではなかったのか。

「ただ、覚醒したのは創造の能力でのこれに伴ってお主は神力を持つことになったんじゃが。

体はまだ半覚せいなせいで上手く力を使えんのじゃ」

「はぁ？」

「簡単に言うとじゃな。神力に今の体が耐えられんのじゃ。」

ああ！なるほど。

「ゆえに注意だけしておこうと思っての」

「わかった。ちなみに使ったら？」

「体が消滅する」

やっぱりか。

「まぁ、短時間で少しだけなら今のお主でも出来るがの」

「そうなのか？」

「だが無茶はするなのではないぞ」

バタン・・・・・・床が割れて・・・・。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

また落ちていった。

最終決戦！！そして（後書き）

今回は結構書けたので一気に投稿しました。

次の投稿はいつになるか。

明日かそれとも1週間後か。

では。

祝・ＰＶ４万突破

レ「まさか、４万を超えてるとは」

作「自分でもびっくり」

レ「なぜ、今頃？」

作「色々ありまして。気づいたらという感じです」

レ「で！この後の話はどうする？」

作「う～ん。とりあえず原作どうりにアリカ姫の投獄と救出」

レ「なるほど」

作「そのあとは、原作開始までの間に数話ほど入れてといった感じで」

レ「そんなところか」

作「ただ、その数話がこの後結構重要になってくるかも知れない」

レ「そうか」

作「後、オリ主らしくヒロインもちゃんとかんがえてる」

レ「な！なんだと！！」

作「まぁ、ハーレムかそうでないかは今後の気分次第で」

レ「な、なぜだ！！」

作「作者だから」

レ「『終焉の閃光』！！」

作「フッ、その攻撃は当たらない」

スカ！！

レ「な、何で当たらない！！」

作「作者（おれ）だから」

レ「くっ！」

作「今後の展開はこんなところで、ではさらば」

ボン

レ「煙玉か、こういう道具も作ってみるか？

」

英雄！処刑！！観光？

ｓｉｄｅレオン

「ここは？」

目を開けるとそこは、知らない部屋だった。

この場合「知らない天井だ」と言うべきなんだろうが。

「おや？目を覚ましましたか」

アルがそこにいた。

「どれくらい寝てた？」

「そうですね３日と半日といったところです」

３日かかなり寝てたな。

「他の奴らは？」

「他はみんな元気ですよ。ただ」

「？」

「ゼクトが死にました」

「そうか」

ゼクト、お前は逝ったか。

「驚かないのですね？」

「まぁ・・・な」

原作を知っているとは言えないしな。

「しかし、当初は意識不明に重体でしたが、今はほとんど回復しています。
回復魔法のおかげであるとしても早すぎですね」

「まっ、俺にも色々有るのさ」

さすがみ神になりかけとは言えないな。

ドタッドタッドタッドタッ・・・・バーン！！

勢いよく扉が開かれた。

「レオン！！」

ナギか。

「では、私はこれで」

アルは転移魔法で転移していった。

「あ！アルの奴逃げやがったな」

「で？何の用だ？」

タダ見舞いに来ただけならアルのこと気にするはずないしな。

「そうだ！式典が有るから行くぞ！！」

「めんどうだ」

「そう言うと思った。ジャック！！」

「よっしゃぁぁぁ」

俺はジャックに担ぎあげられて、連行された。

その後、式典で表彰されたがどうでもいい。

その後オスティアが落ち、アリカ姫は戦犯としての罪をなすりつけられ投獄。
処刑は2年後となった。

俺はマギステル・マギの仕事をしながら銃の腕を上げていた。狙撃に、接近戦闘
元々基礎は出来ていたので割とすぐに習得し他の戦闘技術や剣術、武術にも手を出すことにした。

えっ？２００年何をしていたかって、それは基本的に魔法に力を入れていたんだ。
とくに空間に重力、時間の基礎は大変だったからな。

そして、2年が経とうとしていた。

俺は今、赤き翼のメンバーが集まっている隠れ家に来ている。中から言い合いが聞こえるな。

「ナギ、助けにいかなくてもいいのか！？」

詠春が怒鳴る。

「・・・・・」

ナギはなにも答えない。

「もう時間は無いんですよ。」

「わかってるよ、アル。」

「何を悩んでいる」

「「「レオン！！」」」

全員がこっちを一斉に向いた。

「今までどこいってたんです？」

「仕事をしながら武術類の修行」

「まだ、強くなるつもりか」

な、なんだよ強くなるのがいけないのか？

「なぁレオン・・」

「なんだナギ？」

「立派な魔法使いってなんだ。正義ってのは一体なんなんだ。」

「フーン、正義とは己の心かな」

「「「えっ！！！」」」

三人共驚いている。

「簡単な話だ、人にはそれぞれの正義がある。極端にいえば人の数だけ正義はあることになる。」

「「「「・・・・・・」」」」

みんなは黙って聞いている。

「だが、それだけの数の正義が有れば衝突もする。
その時争いや何やらが起こり負けた方もしくは数が少ない方が悪とされる。
結局なところ正義とは自分が何をしたいかということだ、ナギ！お前はどうしたい？」

「正義は己の心か・・・・」

ガタン・・ナギはいきなり立ち上がり

「そうだな、そうだよな俺は俺のしたようにすればいい」

「どうやら決意したようだな」

「ああ！俺はアリカを助けに行く！！」

「やれやれやっとか」

「そうですね」

こうして俺たちはアリカ姫を救出することが決まった。

そしてアリカ姫処刑の日がやってきた。

「準備は？」

「出来てます」

「あー、早く暴れたいぜ」

「ジャック、もう少し落ち着け」

今日は妙にやる気だな。

「ところでナギはどこだ？」

詠春が言う。

「別の場所で待機中だ。」

「これより、重戦争犯罪人アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの処刑を開始する！」

ウォォォォォォォォ！！！！

うるせさいな。そこまでして手柄がほしいか！？

そしてアリカ姫が谷底へ落とされる。

「さて俺たちも行きますか。」

「「おう！」」

「フフフ、楽しくなってきましたね。」

で、赤き翼の全員で元老院の爺どもと周りの兵をボコボコにして、ナギとアリカ姫は夕日をバックにキスをしていた。

「絵になってるな」

「そうですね」

「ガハハ、ナギのやつついにやりやがったか！」

「写真を取っておくか（カシャ）」

上から詠春、アル、ジャック、俺だ。

この後、俺たちが持っていた証拠をつかってガトウの交渉の末に今回の騒動は無かったことになった。

取った写真を二人に見せたら二人とも真っ赤になって追いかけてきた。

写真は記念にあげた。

さて、俺たちは今京都にいる。あの後、魔法界でいるのもな～ということになり

詠春の里帰りにつきあう形で日本にきた。（ついでにナギとアリカ姫の新婚旅行もかねて）

「フム、やはり懐かしいな」
前世では日本人の俺、懐かしくないはずがない。
クイ、クイ、っと引っ張られる。
「ん？」
「レオン」
「あ～、アスナちゃんか」
「（コク）」
後、何故か俺はアスナちゃんに好かれているみたいだ。
処刑を回避した後に初めて会ったから、まだ1カ月もたってないのに
何かと周りにいるのだ。
「オナカスイタ」
「そうか、・・・・詠春」
「なんだ？」
「夕食まで後どれくらいだ？」

「そうだな、後1時間位だな」
後1時間位か。
「アスナちゃんもう少しだけ我慢できる？」
「（コク）」
ウム～、中々かわいいな。・・・・1時間か丁度いい。
「タカミチ少年」
「はい、師匠」
ちなみに、タカミチは今俺の修行を受けている。
死と隣合わせの状況で死なないように鍛える。
傍から見たら地獄にしか見えない修行だがそのせいか強くなっているのだが、
やや洗脳気味になってしまった。
「修行の時間だ逝ってこい」
「はい！！」
そういうって混沌の聖域に入って行った。実戦で鍛えるならやっぱここだろ。
え？安全性？一応俺の分身を先に入れて準備は出来てるしな。

詠春の家で夕食を済ませた俺たちがくつろいでいたら。

「みんな！すまないが手伝ってくれ！！」

「なんだ詠春？」

「ん？襲撃でもあったのか？」

「そっちの方がまだマシだ。スクナの封印が解けてしまった！」

スクナとはリョウメンスクナノカミという飛騨の大鬼神だった。
元々守護者として祭っていたのだが何代か前に悪用されたので封印ということになった。

その封印が長い年月を経て破れたというううことだ。

「よっしゃぁぁ、俺が行くぜ！！」

「あっズルイぞジャック！俺もやるぜ！！」

ナギとジャックが意気込んで向かっていった。

「あの二人が行くなら問題ないな」

「そうですね」

「僕はスクナに同情します」

「まぁ、そう言うな」

俺たち見学。

「俺は再封印の手配をしてくる」

詠春は自分の仕事をしに行った。

「おらぁぁ、『千の雷』」

「『斬艦剣』ほぃっと」

バァーン

ザシュ

「タカミチ少年の言った通り、スクナに同情しかねないなこれは」

二人によるフルボッコでスクナは再封印された。

翌日、京都にある別荘（ナギとアリカ姫の住まい）で写真を取り現

地解散となった。

さて、これからどうしようか。

英雄！処刑！！観光？（後書き）

約1週間ぶりの投稿です。

これからはこのペースになると思いますが

よろしくお願いします。

修行！！まさかの原作ブレイク！！

ｓｉｄｅレオン

今俺はとある森で修行している。体術と並行して重力、空間、時間の魔法の
扱いを完璧にしておこうと思ったのだ。
赤き翼の時はそんなに時間を取れなかったし別荘を使うにも何が起きるかわからなかったしな。
その後は体術に時間をかけいたからな。

「『妖精眼（グラムサイト）』発動！！」

妖精眼を発動して神の辞典を読んでいく。

「フム、ここはこうして、そこはこうしてと」

解読と並行して術式を組み立てていく。

解析だけでも丸一日は掛かるし、妖精眼の発動時間を考えればもっと時間が
かかるので並行してやっている。

半日は術式の構成、もう半日は体術の修行。

「ガトラとラグナを使うか」

最終決戦の時使った双銃を取り出し単純に射撃の鍛錬、その後にドラフナフを
使い狙撃の訓練。

ついでに、創造を使い銃の弾を作って実弾の修行もしている。
創造は作るのは簡単だが負担が凄くかかる。

最後に体術、基本これが一日の修行風景。

たまに、依頼をこなしに町に行ったりもする。

そんな日常を何年か続けていたある日。

ドガァァァァン、ドゴーン。

「ん？爆発音・・・しかもこっちに来る」

近くで戦闘でもしてるのか？

「あれ？この魔力の気配は・・・・まさか！！」

徐々に迫りくる爆発音、しかし感じる魔力は懐かしいものだった。

ｓｉｄｅガトウ

「はぁ、はぁ、はぁ、」

俺たちは今追われている。どこのやつかはわからないが狙いはおそらくアスナだろう。

「ガトウさん！このままでは追いつかれます！！」

弟子のタカミチがそう言い敵の攻撃をはじいている。

「ガトウ？」

アスナが心配そうにこっちを見つめている。

「大丈夫だ、必ず逃げ切って見せる」

そう言ったものの、厳しい状況なのは変わりない。タカミチがここまで強くなければもう終わっていたかも知れない。

「レオンに感謝しないとな」

奴がタカミチを鍛えてくれなければもう勝負はついていただろう。

しかし、迎え撃たなければ無理か！？

「タカミチ！この先に開けた場所があったらそこで俺が迎撃する。お前はアスナを連れて先に行け！！」

「しかし！それではガトウさんが！！」

「だが！これしか今は手がない！たとえ二人で迎撃したとしてもその隙にアスナを狙われればアウトだ！！」

「くっ！！」

タカミチは唇を噛みしめていた。

前に開けた場所が見えた！！

「よし！行くぞ！！」

そうして開けた場所に出た瞬間に。

「よお！久しぶりだなガトウ」

懐かしい戦友の声が聞こえた。

ｓｉｄｅレオン

まさかとは思ったが、やはりガトウとタカミチにアスナちゃんだったか。

おそらく原作のガトウが死ぬ所だっただろ。

「お、お前はレオン！！」

「レオンさん！なんでここに！？」

「レオン！」

三者三様の反応だった。

「詳しい話は後だ！」

その時俺たちの前に黒いローブを被った見るからに怪しい連中が現れた。

「お前は！レオン・マスタング！！」

「なぜ「黒銀の殲滅者」が！？」

「構わん！一緒に始末しろ！！」

リーダー格の男がそう言った途端に全員が『燃える天空』や『魔法の射手』などを撃ってきた。

「甘いな、せっかくだ新術の実験台になってもらおう。
レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ『反射空間』！！」

そう唱えると俺の目の前に空間の裂け目だでき、攻撃がすい込まれたと
思ったらそのまま相手に返っていた。

「「「何！！」」」

ドガァァァァァン

「フム、中々使えるな」

「くっなんだ今のは！？」

「まだだ、まだ行ける」

「しつこいなレン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ『グラビティブラスト』！！」

「くっ」

なに！避けた！

「気を付けろ！こいつら普通の人間じゃない！！」

なるほどな、だからガトウが苦戦したわけか

「召喚！！」

ローブの集団の何人かが召喚魔法を使いやがった。

周りに悪魔が次々と現れる。代わりに術者が倒れていく。

「まさか限界を超えて召喚するとは」

「これならいくら貴様でも！」

「フッ、レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ『グラビティダウン』」

その瞬間周りの重力が増え相手は地面に這いつくばった。

「「なっ！」」

「お前たちはの所は今通常の5倍の重力が掛かっている。
これで終わりだ！レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ　『メテオ・ブレイズ』！！」

敵の上に『メテオ・ブレイズ』を使い重力で更に加速した炎の塊が襲いかかる。

「おいレオン！このままじゃ俺たちも！」

「心配はない、レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ『空間隔離』」

『空間隔離』は位相空間をズラすことによって、向こうからの干渉をシャットアウトする空間魔法。

今回使った空間系はかなり反則的はものばかりだな。

「解除」

『空間隔離』をといたら周りは焦土だった。

「相変わらず無茶苦茶だなレオン」

「うるさいぞ」

ガトウそれは嫌味か？

「すごい！」

「レオン」

タカミチは驚いているし、アスナちゃんは飛びついて来た。

「お前なんでこんなとこにいたんだ？」

「ん？、修行」

「そ、そうか」

なんだよ俺が修行するのが行けないのか！？

「しかし、なんで追われてたんだ？」

知ってるけど。

「わからんが、おそらく狙いはアスナだ」

「奴らの残党か？」

「それは調べてみないとな」

フム、後１０年くらいしたらまた動くしな。

「で？二人のことはどうする？」

「それなんだが、麻帆良に行かせようと思う」

「麻帆良にか」

大丈夫か？正直あそこの魔法使いは弱いぞ。

「タカミチの一時期いたこともある、大丈夫だろ」

「そうか」

まぁ、原作開始まで何も起きてないしな。

「レオンはこれからどうするんだ？」

「俺か？そうだなもう少ししたら世界巡りでもするかな」

「そ、そうか」

ガトウその反応やめてくれ。

その後少しタカミチとアスナちゃんと話して別れた。

まさかの原作ブレイクだった。

後、アスナちゃんには泣きつかれたが。

出会い！魔眼の少女

ドガガガガッ。

ヒュン。

ここは銃撃が飛び交う戦場。

そこに1人の少女がいた。

ｓｉｄｅ？？？

「ここまでかな」

あきらめかけた時。

シィーン

急に銃声が消えた！

「なんだ！？」

急に銃声がやみ静寂があたりを支配する。

そして、

「ッ！！」

向こうから黒いローブを着た見るからにあやしい奴が歩いてきたので
私は手に持っていたライフルを構えなおした。

「ん？、少年兵。いや、この場合は少女兵か？」

声から男だろう。が訳のわからないことで自問自答している。

「お前は誰だ！？」

私は更にライフルを構えて、相手の答えを待った。

「誰かと聞かれても、レオン・マスタングとしか言えないな」

男はフードを取りながらそう言った。

「レオン・マスタング」

聞いたことがなかった。しかし、男の顔はここ最近紛争に介入しては
鎮圧している謎の人物とされている者に似ていた。

「ここ最近紛争に介入して鎮圧しているのは、お前か？」

「そうだが」

なら必要以上に敵意を向けない限り大丈夫のようだな。

介入者は敵対するなら容赦しないが、敵対しないなら問題ないと言われている。

「君は？」

「え？」

私は思わず呆けてしまった。

「名前」

名前・・・聞かれたのは久しぶり。

「マナ・アルカナ」

私は名前を答えた。

ｓｉｄｅレオン

ここ最近紛争に介入していたら謎の介入者みたいな感じにみられるようになってしまった。

「顔が知られてるのに、誰も気づかないとはな」

ぼやきながら今日も鎮圧を繰り返す。

「さて、このあたりは片付いたか」

銃を乱射していた集団を片づけ時。

「ん？」

ふと、向こうの方に人の気配を感じた。

そこでは少女がライフルを構えていた。

「ん？、少年兵。いや、この場合は少女兵か？」

どちらが正しいのかと考えていると。

「お前は誰だ！？」

更にライフルを深く構えてこちらを睨んでいる。

「誰かと聞かれても、レオン・マスタングとしか言えないな」

フードを被ったままではまずいなと思い脱いだ。

「レオン・マスタング」

つぶやくように俺の名前を言った後。

「ここ最近紛争に介入して鎮圧しているのは、お前か？」

「そうだが」

俺のことを確かめるように質問をしてくるので一応答えた。

しかし、誰かに似てるとような？

「君は？」

「え？」

名前を聞こうとしたら少女は呆けてしまった。

「名前」

もう一度聞き直す。

「マナ・アルカナ」

やはりそうか！！

原作の知識が薄れてきても覚えてる物は覚えている。

マナ・アルカナ・・・つまり龍宮真名。

「これからどうする？」

「考えてない」

そうか・・・なら！

「一緒に来るか？」

「え！？」

そんなに驚くことか？

「どうして？」

「いや、聞いてみただけだ」
選ぶのは本人だしな。

「・・・・・・・・・いく」
「え？」
「一緒にいく」

以外だなもう少し悩むか、断ると思ったが。
「なら、すぐに出発だな」
「うん」
なんか、やや言動が幼くなったような。

出会い！魔眼の少女（後書き）

マナです。

一応メインヒロインは真名で行こうかと思っています。

ほかにもサブヒロインも入れる予定です。

別れ　そして悪魔襲来！！

ｓｉｄｅレオン

あれから早3年、俺はマナに修行を付けながら各地（魔法世界も含む）を回っていた。

マナを連れて旅に出たすぐ後にナギが死んだとの噂を聞いたが、「生きてるだろ」が俺の中での回答だ。

マナは元から持っていた魔眼のこともあり「魔眼の撃ち手」と二つ名を付けられていた。

「マナ」

「なんですか？」

俺は前から決めていたことを言うう

「そろそろ、修行も終わりだ。お前をＮＧＯ団体「四音階の組み鈴」に登録しておいた」

「だから？」

わかってるくせにわざとらしいな。

「独り立ちの時期だということだ」

「私は師匠から離れる気はないよ」

こいつは。ちなみに俺が銃に関して更に修行を付けたためか俺のことを師匠と呼ぶようになった。

しかし、そろそろ動かなくてはな。原作まで後7年、だからな。

「少しは社会の勉強した方がいいということだ」

「それが？」

ほんとに強かになったよなこいつ。

「フム、仕方がない。強制転移で「待った！」？」

「わかったけど、ひとつお願いを聞いてくれかいかな？」

？お願いだと。

「私と仮契約（パクティオー）してほしい」

「ぶっ！！」

ここでそれが来るか！

「承諾しかねるな」

「なら！？（ドスッ）うっ」

隙をついて気絶させた。

「悪いな。俺にも色々都合があるからな」

その後転移で「四音階の組み鈴」に行きマナを預けた。

さて、それから約1年俺は今イギリスのウェールズに来ている。
なんでかって、悪魔の襲撃を何とかするつもりだったんだけど・・・・・もう始めっているんだよ！！

「レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ　魔法の射手　連弾・闇の100矢！！」

ドパッパッパッ

「くそ！切りがない！」

大呪文系が使えれば楽だが周りを巻き込みすぎる。

ん？・・この魔力はナギか！？

「おと～さん～」

あれは・・・ネギか！？

「マズイ！！」

悪魔がネギ坊主を狙っている。この魔力、おそらく爵位級だ！！

「属性防御！！」

「「「「！！！！！」」」」

その場にいた、スタン爺さんにネカネにネギ、それに悪魔も驚いている。

「とりあえず、消えろ！レン・ラル・ルクス・ラ・ラルヴァ『グラビティブラスト』！！」

逃げたか・・・まぁ仕方がないか。

「あなたは一体？」

ネカネが警戒しながら質問してくる。

「なに、ナギの古い知り合いだ」

「ナギのじゃと！！」

そんなことを言ってる内に当の本人が現れた。

「「ナギ！！」」

「おとうさん？」

二人は驚き、ネギは訳がわからないようだ。

「レオン」

「久しぶりだな。お前何してるんだ？」

「・・・・・・・」

沈黙・・相当なことみたいだな。

「言えないならいい」

「すまない」

しかし、気配があやふやだな。分身か？

「長くないようだな。今のうちに何か残してやれよ」

「そのつもりだ」

そう言ってナギはネギの所に行って、杖を渡して去って行った。

どうやら思っていた以上に事態は深刻みたいだな。

その後、救助隊が来るまで俺は三人の護衛をした後、今回の襲撃事件を調べるために魔法界に行くことにした。

別れ　そして悪魔襲来！！（後書き）

とりあえず書けました。

夏休みに入っても課題が大変です。

ネギ卒業！ついに原作開始！！

悪魔の襲撃から６年。

ｓｉｄｅネギ

「卒業証書授与・・・・ネギ・スプリングフィールド君！」

「ハイ！」

今日で僕は魔法学校を卒業。

「ネギー！」

「アーニャ！お姉ちゃん！」

後ろから赤髪の少女と金髪の女性がやって来る。

「修行の地何処だったの？」

「私はロンドンで占い師よ」

「今、浮かびあがるとこ」

紙に修行場所が浮かび上がる

「お・・・・どう？」

「えーと・・・・日本で、先生をやること」

「「ええーーーー！？」」

な、なんで！？

「こ、校長先生！　日本で先生ってどーゆーことですか！？」

「ほう・・・・先生か・・・・」

「何かのマチガイではないのですか！？」

ぼ、僕が先生。

「まぁ、落ち着くのじゃ。向こうの校長はわしの古い知り合いじゃし心配はない。」

「で、ですが！」

「そーよ！ネギが先生なんて出来るわけないじゃない！！」

あ、アーニャ～ひどいよ～。

「とにかく決定事項じゃ！今さら変更はできん！それにこれきしのことを乗り越えられなくて

「立派な魔法使い《マギステル・マギ》」になれると思ってるのかの？」

「「ッ！！」」

そ、そうだ！僕は父さんのような魔法使いになるんだ！

「や、やります！」

「よろしい。では、この話はここまでじゃ」

こうしてネギの麻帆良行きが決定した。

ｓｉｄｅレオン

どうも、レオンだ。

この６年色々調べるのに各地を回って、情報を集めて回った。

そして俺は今、帝国にいるガトウと話すために帝国の城にいる。

「で、結局どうだった？」

「あぁ、ほぼ間違いなく一部の元老院の仕業だろう」

元老院・・・・・いい加減、潰すか？

「こっちもいやな情報をつかんだ」

「なんだ？」

「奴らの残党が動いているというものだ」

奴ら・・・・「完全なる世界」の残党が、な。

「なんだと！！」

「かなり深くもぐっている上に動いているのが少人数なせいで動きがつかみにくい」

「なら、セラス総長とリカード議員にも連絡をしておこう」

ま、それくらいしか今のところ対処法はないな。

「しかし、お前も相当老いたな」

「お前とは違って、普通の人間だからな」

「なんだ？嫌味か、嫌味なのか」

言ってくれる、まだ現役で調査員しているくせに。

「そういえばレオン、お前ここ6年ほど表に出てないせいで行方不明、
もしくは死んだなんて噂されてるぞ」

「そうか」

そっちの方が都合がいいけどな。

「驚かないんだな」

「その方が動きやすいしな」

だが、これからどう動くか・・・・・・・あ！

「ガトウ、俺は麻帆良に向かおうと思う」

「なんでまた？」

「アスナちゃんのこともあるし、一応弟子との約束もあるんでな」

「お前に、弟子！？」

「銃の弟子だがな」

マナ・・・・・原作道理なら麻帆良にいるだろうからな。

「わかった。こっちは奴らに関してテオドラ皇女と相談の上で調査する」

「そうしてくれ。こっちでも動きがあったら連絡する」

ガトウと別れ。俺は麻帆良に向かって出発した。

さて、麻帆良ではどういう風に動こうかな。

ネギ卒業！ついに原作開始！！（後書き）

夏休みに入った。

しかし、試験があり大変でした。

それもようやく終わり、こうして更新できました。

今回は間章みたいなものです。

潜入！麻帆良学園！！

ｓｉｄｅレオン

俺は今、麻帆良学園都市の世界樹の広場にいる。

目の前では魔法先生や魔法生徒が学園長（妖怪？）の話を聞いている。

えっ？なんで騒ぎにならないかって？

それは、いつか使った「空間隔離」を組み込んだ認識阻害魔法を作ってしまってな。

某妖怪の畏れみたいに「そこにいて、そこにいない」みたいなことが可能になった。

スネークも真っ青だな。

ただ、術式の関係で通常の認識阻害みたいにずっと発動し続けるのは無理だが、

丸１日位なら問題ない。

これを見破れるとしたらそれこそ神か相当特殊な感知能力でも持ってないと無理だろう。

「では、くれぐれも準備は怠るでないぞ」

魔法先生、魔法生徒が解散していく。
話の内容はナギの息子、ネギがここ麻帆良学園に教師として修行にくるとのことだった。
「いよいよ原作開始か」
そう呟きながらこれからの方針を考えていた。
学園長（妖怪？）に会って警備員になるか？・・・・「駄目だな」
そんなになれば、ネギのサポートする羽目になりかねない。
何よりネギが俺の顔を知ってるかもしれないしな。
このまま徘徊してるのもマズイしな。
そう考えていると図書館島の前まで来ていた。
「ん？・・・・この魔力は？」
アル・・・・のだよな？
「なんで、こんなに弱ってるんだ？・・・・・行ってみるか」
丁度夜なので「ダークゲート」を発動した。

ドプッ

ボコッ

「ッ！！誰ですか！？」

驚くアル。

「そう警戒するなよ。軽くショックだ」

「レオン！？あなたでしたか」

「ああ、久しぶりだな」

アルの奴なんか今にも死にそうだな。

「ええ。１８年ぶりですね」

「１８年か、何かあったのか？ずいぶん弱っているみたいだが」
「１０年ほど前にちょっと」
１０年前か。
「それより何故あなたがここに？」
「アル、奴らが・・・「完全なる世界」の残党が動き出している」
「ッ！！本当ですか！？」
「ああ」
「それで、一応ここにも来たと」
「それもあるし弟子の様子も見ときたかった」
「弟子？ああタカミチですね」
「後、マナな」
あいつも大きくなってたな。
「マナ？龍宮　真名ですか」
「ああ」

「彼女が、あなたの弟子？」

「一応戦い方と銃の使い方を教えた」

「魔眼の撃ち手」の撃ち手の二つ名は今も生きてるしな。

「そうですか」

「後、ここに泊めてくれ」

「はぁ？」

アルが珍しく呆けた顔になった。

「上だと爺に見つかると面倒だし、かといって他に当ては無いしな」

「はぁ、別にかまいませんが」

こうして俺はアルの家（？）に居候することになった。

ｓｉｄｅアル

驚きました。まさかレオンが現れるとは。

レオンは不老長寿なためあの頃から少ししか変わっていませんでした。

少しでも成長させた訳を聞くと「周りが不審がるから」と言っていましたが。

彼がここに来たのはアスナちゃんと弟子（２人）の様子を見に来たと言ってますが

ここに居候するということは何かありそうですね。

これからまた退屈しなくて済みそうですね。

ｓｉｄｅレオン

アルからＯＫをもらった俺は開いていた部屋の整理をして私物を「収納空間」から取り出し
荷ほどきをしていた。

「これをこっちに、これをそっちに」

せっせと荷物を置いていく、元々それほどの多くはないが。

「あっ！アル、爺達には俺のこと言うなよ」

「ええ、わかっていますとも」

一応アルにくぎを刺しておく。

「さて、久しぶりに「時の庭園」に籠りますか」

「時の庭園」詳しく言うと、外の１時間が中では半年と言う飛んで

もない別荘だ。
中には好きなだけいることができるが、一度出たら1週間使用不可になる。
何故こうなったかは作った俺にもわからない。
おそらく時間の術式をいじったことが原因だろうが。
この術式が安定しないため長時間の使用は無理だった。
せいぜい1時間で1日の元の設定までだったが
苦労の末に1時間が半年という無茶な設定が完成した。

「アル、俺は別荘に籠るから半日立ったら外から呼んでくれ」
半日、別荘の中では約6年。
「わかりました。しかし、何をする気ですか？」
「これからに備えてだ」
そうして俺は別荘に入った。

潜入！麻帆良学園！！（後書き）

どうも！お久しぶりです。

ここ最近、スランプ気味で中々書けませんでした。

どうにか書いたので投稿しました。

主人公のチートぶりがますます加速してます。

少し矛盾が出るかもしれませんがあまり気にしないでほしいです。

更新停止のお知らせ

最強オリ主ネギま！の世界へをお読みの皆様にお詫び申し上げます。

今回の投稿をもって最強オリ主ネギま！の世界への更新を停止させていただきます。

理由といたしましては自身で内容が把握できなくなり、また自身の力不足による問題に

対処が出来なくなったことがあります。

またいつの日か力をつけ再び投稿することを考えてはいますがいつになるかは

わかりません。

なるべく早く復活したいと思ってはいます。

では、またいつの日か

以下の分は文字数を稼ぐためのものであり本文には関係ありません

ーーーーーーーーーーーーーーーー

aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0737m/

最強オリ主ネギま！の世界へ

2010年10月30日01時11分発行